

〈彙 報〉

彙報<sup>1</sup>  
Miscellaneous News

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp.135-169. ISSN 2433-8923



<sup>1</sup> 本稿の著作権は著者が保持し，クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC BY）下に提供します。<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 2017 年度開講科目一覧

List of Courses 2017-2018

### 1. 世界教養プログラム（地域言語科目）／主専攻語科目

#### 1-1. 地域言語 A（言語文化学部）

授業科目		授業題目	担 当	単位
日本語 I	共通	音声学・音韻論	風間	日本人 : 10 留学生 : 14
		日本語学入門・文法-	川村	
		日本語教育学入門	海野（春期）・小柳（秋期）	
		日本文学史	セン	
	日本人	日朝対照言語学	韓	
	留学生	古文入門	川村	
		文章表現・読解	セン（春期）・海野（秋期）	
		口頭表現 I	海野（春期）・阿部（秋期）	
日本語 II	共通	文書資料講読（古典）	村尾	日本人 : 10 留学生 : 10
		文章資料講読 I	柴田	
		比較文化論	清水（春期）・吉田（秋期）	
		対照言語学総論	風間	
		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	
	留学生	口頭・文章表現 II	望月（春期）・阿部（秋期）	

#### 1-2. 地域言語 A（国際社会学部）

授業科目		授業題目	担 当	単位
日本語 I	共通	日本語学入門・文法	幸松	日本人 : 10 留学生 : 14
		日本文学史	セン	
		日本地域研究入門 I	吉田（春期）・嶋（秋期）	
		日本地域研究入門 II	米谷（春期）・石居（秋期）	
	日本人	日朝対照言語学	韓	
	留学生	古文入門	川村	
		文章表現・読解	村尾	
		口頭表現 I	阿部（春期）・海野（秋期）	

日本語Ⅱ	共通	文章資料購読Ⅰ	柴田	日本人 : 8 留学生 : 10
		比較文化論	清水（春期）・吉田（秋期）	
		地域社会研究史料講読	竹ノ内（春期）	
		文章資料講読（社会）	米谷（秋期）	
		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	
	留学生	口頭・文章表現Ⅱ	阿部（春期）・小柳（秋季）	

### 1－3. 主専攻語科目（外国語学部）

#### 1 年次

授業科目		授業題目	担 当	単位
日本語Ⅰ	共通	音声学・音韻論	風間	日本人 : 12 留学生 : 16
		日本語学入門・文法	A 川村・B 幸松	
		日本語教育学入門	海野（春期）・小柳（秋期）	
		日本近代文学史	セン	
		日本地域研究入門Ⅰ	吉田（春期）・嶋（秋期）	
	日本人	日朝対照言語学	韓	
	留学生	古文入門	川村	
		文章表現・読解	A セン・海野/B 村尾	
		口頭表現Ⅰ	A 海野・阿部/B 阿部・海野	

\* 今年度履修者なし。

#### 2 年次

授業科目		授業題目	担 当	単位
日本語Ⅱ	共通	対照言語学総論	風間	日本人 : 12 留学生 : 12
		文章資料講読（古典）	村尾	
		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	
		文章資料講読Ⅰ	柴田	
		比較文化論	清水（春期）・吉田（秋期）	
		文章資料講読（社会）	米谷（秋期）	
		地域社会研究史料講読	竹ノ内（春期）	
	留学生	口頭・文章表現Ⅱ	A 望月・阿部/B 阿部・小柳	

## 2. 地域科目

### 2-1. 地域基礎科目

言語文化学部・国際社会学部

授業科目	授 業 題 目	開講学期	単位	担当
地域基礎 1A (日本 1)	近代日本のアジア観 ー〈南方・南洋〉をめぐって	春期	2	大久保
地域基礎 1A (日本 2)	日本社会論：社会科学的入門	春期	2	春名
地域基礎 2A (日本 1)	日本の都市と建築	春期	2	初田
地域基礎 2A (日本 2)	沖縄／日本の戦後社会運動から見る世界	秋期	2	上原
地域基礎 2A (日本 3)	日本史入門	秋期	2	ポーター
地域基礎 2A (日本 4)	近代日本の文化と社会	春期	2	友常

\*外国語学部の地域基礎科目（「日本地域基礎Ⅱ」）は、言語文化学部・国際社会学部の地域基礎科目（「地域基礎 1A（日本 1）」）と合同で開講された。

### 2-2. 地域専門科目

\*今年度の地域専門科目（「地域言語論」「地域文化論」「地域社会論」）は全て専修専門科目と合同で開講された。専修専門科目の一覧を参照のこと。

## 3. 専修プログラム／専修専門科目

\*「授業科目」が専修専門科目名（外国語学部）と異なる場合、「備考」にその科目名を記す。

\*この他、各教員の担当する卒業論文演習・卒業研究演習（各 4 単位）あり。

### 3-1. 言語・情報コース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担当	備 考
言語研究入門	講義	おもしろいぞ言語学・世界言語編 A	春期	2	風間	備考は未確認(以下同じ)
	講義	おもしろいぞ言語学・世界言語編 B	秋期	2	風間	
日本言語研究 概論	講義	現代語文法概論	春期	2	幸松	
	講義	現代語文法 概論と各論（複文）	秋期	2	幸松	
日本言語研究	講義	日英語対照： 英語で説明する日本語文法	春期	2	望月	
	講義	現代語文法	春期	2	川村	地域言語論・国語科教育法Ⅰと共通
	講義	文法史	秋期	2	川村	地域言語論・国語科教育法Ⅰと共通

<彙報>2017 年度開講科目一覧

	演習	日本語史の諸問題 1	春期	2	川村	
	演習	日本語史の諸問題 2	秋期	2	川村	
	演習	文法と語彙	春期	2	早津	
	演習	文法と語彙	秋期	2	早津	
	演習	言語教育のための日英語対照研究 と言語理論 I	春期	2	望月	
言語学 特殊研究	講義	おもしろいぞ言語学・感動編 A	春期	2	風間	日本地域言語論・ 言語記述理論と共 通
	講義	おもしろいぞ言語学・感動編 B	秋期	2	風間	日本地域言語論・ 言語記述理論と共 通
	演習	言語学演習	春期	2	風間	
	演習	言語学演習	秋期	2	風間	

### 3-2. グローバルコミュニケーションコース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担当	備 考
グローバルコミュニケーション 研究入門	講義	グローバル時代の日本語教育の世界へ分け入ろうとするあなたへ	秋期	2	櫻井	
日本語教育学 概論	講義	日本語教授法	春期	2	谷口	
	講義	日本語教育のための音声トレーニング	春期	2	阿部	
日本語教育学 研究	講義	日本語の第二言語習得論	春期	2	海野	
	講義	日本語教育のための音声教育実践	秋期	2	阿部	
	講義	日本語の第二言語習得入門	秋期	2	海野	
	講義	語用論、談話分析	秋期	2	谷口	
	演習	日本語教育と語用論 1	春期	2	谷口	
	演習	日本語教育と語用論 2	秋期	2	谷口	
	演習	日本語教育学演習	春期	2	阿部	
	演習	日本語教育学演習	秋期	2	阿部	
	演習	日本語の第二言語習得演習 1	春期	2	海野	
	演習	日本語の第二言語習得演習 2	秋期	2	海野	

### 3-3. 総合文化コース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担当	備 考
総合文化研究 入門	講義	日本文化研究入門	秋期	2	柴田	
日本文化研究	講義	物語と小説の理論	春期	2	柴田	日本文学と共通
	講義	日本古典文学 1	春期	2	村尾	日本文学と共通
	講義	日本古典文学 2	秋期	2	村尾	
	講義	近現代日本の文学と文化的社会的背景	春期	2	坂東	
	講義	近現代日本の文学と文化的社会的背景	秋期	2	坂東	
	講義	近現代日本文学 1	春期	2	セン	
	講義	近現代日本文学 2	秋期	2	セン	
	演習	近代文学演習	春期	2	柴田	
	演習	近代文学演習	秋期	2	柴田	
	演習	日本古典文学 1	春期	2	村尾	日本文学と共通
	演習	日本古典文学 2	秋期	2	村尾	日本文学と共通

### 3-4. 地域社会研究コース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担当	備 考
日本地域研究	講義	19 世紀日本の巨大都市の形成と発展	春期	2	ポーター	
	講義	19 世紀日本における貧民の救済と統制	秋期	2	ポーター	
	講義	民衆史Ⅰ マイノリティスタディーズ	春期	2	友常	日本地域社会論と共通
	講義	民衆史Ⅱ 宗教と芸能	秋期	2	友常	日本地域社会論と共通
	講義	日本の歴史—地域社会と人々の暮らし—	春期	2	竹ノ内	日本地域社会論と共通
	講義	日本の古文書を読む	秋期	2	竹ノ内	日本地域社会論と共通
	講義	日本の伝統社会	春期	2	吉田	
	講義	現代日本経済史および日本経済論	秋期	2	河村	日本地域社会論と共通
	講義	近代日本思想とアジア	秋期	2	米谷	日本地域文化論と共通
	演習	19 世紀日本における都市貧困の社会史	春期	2	ポーター	
	演習	幕末・維新时期大阪の都市社会史	秋期	2	ポーター	
	演習	日本の伝統社会を考える	春期	2	吉田	
	演習	日本の伝統社会を考える	秋期	2	吉田	

< 彙報 > 2017 年度開講科目一覧

	演習	近代日本社会とマイノリティⅠ	春期	2	米谷	日本文化論と 共通
	演習	近代日本社会とマイノリティⅡ	秋期	2	米谷	日本文化論と 共通
	演習	近代性、文化、対抗文化 1	春期	2	友常	
	演習	近代性、文化、対抗文化 2	秋期	2	友常	

## 2017 年度修士論文・修士研究題目 List of M.A. Theses/Projects 2017-2018

### 大学院総合国際学研究科 博士前期課程

氏 名	指 導 教 員	論 文 題 目	備考
<b>言語文化専攻 文学・文化学研究コース</b>			
ボルジェルディー フ ァ テ メ	柴 田 勝 二	夏目漱石の初期作品における女性像分析―作者の鏡像に現れる「死」―	
<b>地域国際専攻 地域研究コース</b>			
ハ ン      ス ン ヒ	米 谷 匡 史	戦後日本人の朝鮮認識―日本朝鮮研究所の活動を中心に―	*
キ ム      イ ン ヘ	米 谷 匡 史	金泰雲『朝鮮詩集』研究―李光洙の詩を中心に―	*
<b>地域国際専攻 国際社会コース</b>			
岩 瀬      み ゆ き	米 谷 匡 史	戦時期の野上弥生子―近代主義・女性・植民地―	*
<b>地域国際専攻 国際日本コース</b>			
嶋 田      莉 子	林 俊 成	ストーリー付アニメーションを用いた漢字記憶識別の効果に関する研究―非漢字圏学習者に対して―	
ギ      ジ ョ ケ イ	林 俊 成	初中級中国語母語話者を対象とした海外日本語教育現場の反転授業の試み―福州大学の「総合日本語」科目を例として―	
白 木      美 依	谷 口 龍 子	談話における語彙表現の選択と読み手の既有知識―日本語とドイツ語を例に―	*
ホ                      ト	谷 口 龍 子	中国日系企業における異文化間コンフリクトと解決方略―現地社員のライフストーリー・インタビュー調査を中心に―	*
マイオーネ ブィン チ ェ ン ツ ァ	谷 口 龍 子	イタリア語母語話者向けの音声教材（試用版）の開発とその使用に関する実践報告―アクセント指導を中心に―	*
アハマド カリーム エズエルディン	谷 口 龍 子	アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者の発話における「のだ」の習得研究	*
土      屋 雪 子	阿 部 新	マーシャルにおける日本語学習者のビリーフ―BALLI とメタファ―分析を応用した言語学習ビリーフ調査から―	*
泉                      大 輔	鈴 木 智 美	「感」の形式的特徴と意味・用法に関する包括的考察	*
キ ン      コ ウ カ	鈴 木 智 美	中国語を母語とする日本語学習者のオノマトペの習得状況―中国の大学における高学年学習者を対象に―	*
オ ウ      テ ン リ ン	鈴 木 智 美	中国語を母語とする日本語学習者のプロソディ・シャドーイングがアクセントの産出改善に及ぼす効果	*
高 田      麻 由	宮 城 徹	スリランカにおける日本語教師の教育観―中等教育機関の教師の語りからの考察―	



リ            チ        ン	宮 城 徹	外国人留学生の精神的健康に及ぼすアルバイト活動の影響—中華系私費留学生におけるアルバイト活動のインタビュー調査を中心に—	
村        川            永	中 井 陽 子	職場における異文化適応に影響を与える要因の分析—南米出身稼ぎ労働者と日本人上司へのインタビュー調査をもとに—	*
高        田            光 嗣	中 井 陽 子	レベル差のある日本語クラスにおけるピア・ラーニングの授業デザイン	*
小    美    濃            彰	友 常 勉	梶大介と梶満里子のバタヤ自立運動の研究—生活記録の読解と思想の考察—	
リ ョ ウ    ゲンバイセイ	友 常 勉	日本在住中国人女性の子育てに関する知識—国際結婚女性を中心にしたライフヒストリー分析から—	
田        村            映	藤 森 弘 子	ベトナム人日本語学習者と日本語母語話者による二者間会話の会話分析—参加の対等性の観点から—	
コ                        ナ	藤 森 弘 子	中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」と「必ず」の習得に関する一考察	*
ウ                        セ    イ	藤 森 弘 子	日本語と中国語における「視点」を表す言語形成	
ラーソン    ベンジャミン フ ィ ー リ ッ プ	藤 森 弘 子	タンデム学習に対するビリーフに関する一考察	*
キ                        シ    ウ        ン	楠 本 徹 也	とりたて助詞に関する一考察—中国人日本語学習者の使用実態を通して—	*
キ ョ ウ                ウ        ン	楠 本 徹 也	呼称における日中対照及び待遇機能	*
コ        テ    ン    イ    チ	中 村    彰	複合辞の一語性について—生成文法のアプローチから—	*
サイ        アイレン	早津美恵子	漫画作品における日本語オノマトペの形態上の特徴とその中国語訳について	*
デ ナザレ    フィゲイラ フ    ラ    ブ    ィ    オ	早津美恵子	日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語にどのように翻訳されるか	*
チ    ン        レイ    テイ	柴 田 勝 二	漱石文学における家族関係	*
イ        ユ    フ    ァ    ン	柴 田 勝 二	大岡文学に表れる闘争と悲劇—その相対的存在を廻って—	*
リ                        モ    ク    ゾ        ン	柴 田 勝 二	漱石前期作品における現実世界と「彼岸的世界」—『草枕』までの作品を中心に—	*
ラ                                キ	柴 田 勝 二	三島文学における二重性と芸術性の関係—天皇観をめぐる—	
コ    ウ        ト    ウ    ト    ウ	柴 田 勝 二	村上春樹作品における動物の表象—鼠、羊と象を中心に—	*
アントネッラ    モル ジ                        ッ                        ロ	柴 田 勝 二	戦後詩誌における「穠」と詩人茨木のり子—戦争から造形された女性詩人—	*
チ    ョ    ウ                ヨ    ウ    コ	依集院郁子	日本人はどのようにユーモアを語るか—「わたしのちょっと面白い話コンテスト」をもとに—	*

＜彙報＞2017 年度修士論文・修士研究題目

サ      ハ   ク   ヨ   ウ	川   村   大	「させられる」述語文の意味と構文—人主語を中心に—	*
キュウ   ケンシュン	海 野 多 枝	第二言語不安から見た遠隔外国語教育—台湾の仮想教室型授業を対象に—	*
オ   ウ   タ   ン   タ   ン	藤 村 知 子	中日大学生による依頼メールの機能的要素の相違点—評価から見た丁寧さと要素の有無・提示順の関係について—	*
ソ   ン                  ル   イ	村 尾 誠 一	平安朝における隠遁思想の受容と変容—都良香・紀長谷雄と橘在列を中心に—	*

\*については、p. 148 以降に修士論文要旨を掲載

2017 年度修士論文・修士研究要旨  
Abstracts of M.A. Theses/Projects 2017-2018

**韓 昇憲（ハン スンヒ）「戦後日本人の朝鮮認識—日本朝鮮研究所の活動を中心に—」**

本論文では、戦後に日本人のみの民間研究団体として朝鮮に対する植民地支配責任を提起した日本朝鮮研究所（1961－84）の朝鮮認識の意義と限界を検討した。特に、60 年代に日朝友好運動のための実践的歴史学をめざした日本朝鮮研究所が、どのような過程を経て 70 年代に在日朝鮮人の権利獲得運動に邁進する運動団体となっていくのかについて考察した。日朝友好運動の理論化を研究活動の目標とした日本朝鮮研究所は、戦後日本で初めて北朝鮮の学者たちと学術交流を行う成果を出した。一方、日本朝鮮研究所は東アジア冷戦が激化するにつれて日朝友好運動の性格と役割をめぐって日本共産党と対立することもあった。共産党を支持した所員たちが研究所を離れた後、日本朝鮮研究所は所員の「差別発言」問題についての部落解放同盟の糾弾に対応するなかで在日朝鮮人差別の現実を直視し、日朝友好運動から在日朝鮮人の権利獲得運動へ活動の重点を移し、研究団体から生活密着型の運動団体に変貌していく。

**金 忍恵（キム インヘ）「金素雲『朝鮮詩集』研究—李光洙の詩を中心に—」**

本研究は日本植民地期という特殊な時代に生きていた金素雲の生涯と作品を通して当時の朝鮮人文学者が抱えていた歴史的状況を調べるとともに、韓国で代表的な親日文学者として知られる一方、詩人としては比較的评价されていない李光洙の詩が金素雲が翻訳した『朝鮮詩集』に収録されている意味を探った。そして、金素雲訳の李光洙詩とその原詩、金時鐘の『再訳朝鮮詩集』を対照する作業を行い、金素雲の翻訳技法とその差異について考察した。

『朝鮮詩集』は金素雲も認めたように、単純に他の詩人の詩を翻訳した「翻訳詩集」ではなく、金自身が創作した「金素雲詩集」というべきものであることが分かった。日本では「名訳」として認められている反面、韓国ではその詩集が発刊された「植民地時代」という特殊な時代背景により、それほど評価されていない傾向があった。しかし、これはおそらく「時代背景」の問題だけではなく、金素雲の翻訳があまりにも「日本風」であることも一つの要因になったと考えられる。

**岩瀬 みゆき（イワセ ミユキ）「戦時期の野上弥生子—近代主義・女性・植民地—」**

本稿は、1930 年代半ばから 1950 年代前半までの野上弥生子のテクストを近代主義、ジェンダー、植民地主義の観点から解釈しなおし、戦時期と戦後における作家の精神の連続性を明らかにすることを目的とする。序章では問いの設定、先行研究、分析対象と構成を提示した。第 1 章では戦時期の言説と作家活動を検討した。第 2 章は女性をめぐる言説に焦点を当てた。第 3 章では、植民地旅行記を分析し、野上の意識に内在化された植民地主

義を明らかにした。終章では戦後に発表された連作小説について論じつつ、全体の議論を総括した。野上の基本的な関心は、日本社会が封建性から脱却し、欧米に倣って合理性と科学性に基づく近代社会が形成されることにあった。そうした観点から、戦時期には戦時体制への女性の参与が説かれ、戦後には社会の民主化が論じられた。野上の近代主義的な発想は、近代化の使命の肯定につながり、内面化された植民地主義は戦後に継承された。

### **白木 美依（シロキ ミエ）「談話における語彙表現の選択と読み手の既有知識—日本語とドイツ語を例に—」**

本論文では、日本語とドイツ語の書き言葉の談話における語彙表現の選択について、語彙カテゴリーレベルの観点から分析した。分析にあたっては、想定される読み手層の既有知識量の多寡と、書き手が選ぶ語彙表現の傾向の対応に注目した。データは、ウェブ上で公開されている、特定の商品の紹介記事を用い、語レベルと意味レベル（句・文・談話のレベル）で整理した。日本語とドイツ語の比較対照からは、個別言語に特有の語彙表現傾向のパターンがあるかどうかを探った。調査の結果、日本語では、文章のメイントピックと上下関係にある語彙より部分全体関係にある語彙のほうが、読者層に応じた語彙表現の異なりが見られた。一方、ドイツ語ではその傾向があまり見られなかった。また、日本語では、読者層に応じた語彙の使い分けがない場合に、7 種類の方法で情報の補足が行われていたが、ドイツ語で見られた方法は 3 種類であった。

### **保 彤（ホ ト）「中国日系企業における異文化間コンフリクトと解決方略—現地社員のライフストーリーインタビュー調査を中心に—」**

本研究では、中国における日系企業で勤める中国人社員に対するライフストーリーインタビューにより、在中日系企業における異文化間コンフリクトの種類、生じる場面および対応行動を分析した。その結果、親日的であるとされている大連日系企業においても中国人社員と日本人社員のビジネスコミュニケーションには常にコンフリクトが生じ、「日本人社員から指示を受ける場面」「日本人社員に報告する場面」「日本人社員に提案する場面」などの八つの場面に、「言語問題」「日本人社員との人間関係」「中国社会と日本社会の相違」などの八つの種類の問題に関してコンフリクトが生じていることが分かった。中国人社員は以上のコンフリクトが生じた際、「回避」が最も使われ、「協調」が 2 番目に多く使われていることも明らかになった。この調査結果により、本研究は言語と非言語の二つの面から解決方略を提案し、ビジネス日本語教育への示唆を示した。

### **マイオーネ ヴィンチェンツァ「イタリア語母語話者向けの音声教材（試用版）の開発とその使用に関する実践報告—アクセント指導を中心に—」**

イタリアの日本語教育では音声教育が重視されていない傾向がある。そこで本研究ではイタリア人向けに日本語のアクセント指導用の遠隔教材を開発、来日経験のないイタリア

人日本語学習者（16 名）に使用してもらい、一連の実践について報告した。教材使用前、使用直後と一か月後のテストの結果を見るとアクセントの向上に一定の効果が見られたことがわかった。さらに、イタリア人学習者に正しい音声で発話をすることを意識させ、音声教育の重要性を認識させることにも成功したと言える。

### **アハマド カリーム「アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者の発話における「のだ」の習得研究」**

本稿はアラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者を対象にし、「のだ」の習得状況を考察することを目的にしている。「のだ」という文末表現は日本語教育では初級レベルの段階で教える項目であるが使用頻度が少ないという現状がある。本研究では、エジプト人日本語学習者の「のだ」の習得状況を包括的に考察するために、学習者の「のだ」に対する知識、学習者の使用状況、学習者の使用意識という三つのアプローチからそれぞれ談話完成タスク、自由会話、アンケート調査の方法により分析を行った。考察を通して、エジプト人日本語学習者は「のだ」の使用を重視しておらず、「のだ」を使用せずにその他の表現やストラテジーを使用しつつ、コミュニケーションを取っていることが判明した。

### **土屋 雪子（ツチヤ ユキコ）「マーシャルにおける日本語学習者のビリーフ—BALLI とメタファー分析を応用した言語学習ビリーフ調査から—」**

本論文では、マーシャル諸島共和国（マーシャル）における日本語学習者のビリーフを明らかにすること、日本語学習者のビリーフが、国の特性にどのように結びついているのかを明らかにすること、日本語教育の発展の可能性について指摘し、現状における課題点に対して提言することの 3 点を目的とし、現地で BALLI とメタファーを用いてビリーフ調査を行った。BALLI 調査の結果、日本語学習者の一般的なビリーフは、自信と誇り、強い内発的動機づけがあること、またメタファー調査の結果、難しい、楽しい、不確実コントロール、内発的動機づけ、正の感情エンゲージメントといった概念が明らかになった。以上から、より個々に対応できる学習環境づくり、学習者が達成感や満足度を得られるような活動を行うこと、マーシャルの学習者に合った音声教材の開発、文字教育の指針作り、学習者の自己形成に寄与できるような日本語教育を考えることの必要性が明らかになった。

### **泉 大輔（イズミ ダイスケ）「『感』の形式的特徴と意味・用法に関する包括的考察」**

本研究では、現代日本語における「感」という形式を取り上げ、コーパスなどの実例に基づき、その形式的な特徴を明らかにした上で、形式と意味との対応関係を明らかにすることを目的としている。形式的特徴に関して、何も前接しない「感」は共起する述語に制約があること、「感」が合成語の後部要素としてふるまう場合は従来の漢語語基以外にも多様な要素が前接すること、モダリティ形式を含む文などが「という」を介さずに「感」に直接前接することなどが明らかになった。また、先行研究の意味記述によると、「感」に

は①「強く深い心の動き」と②「物事に接したときに生じる心の動き」という大きく 2 つの意味があると考えられ、後者はさらに「気持ち」あるいは「感じ」に言い換えられる場合がある。この他に、③「感覚的な尺度に基づいて測った程度」という意味を表す実例があることを指摘し、上記の 3 つの意味とそれぞれ対応する形式について記述している。

#### **金 香花（キン コウカ）「中国語を母語とする日本語学習者のオノマトペの習得状況—中国の大学における高学年学習者を対象に—」**

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者がオノマトペを理解する際に、何を手掛かりとして、どのように理解しているのかを明らかにすることである。

先行研究を検討した結果、オノマトペの難しさを指摘している研究や、学習者のために基本オノマトペの選定を試みている研究などは多く行われているが、学習者が何を手がかりとして、どのようにオノマトペを理解しているのかに関する研究は、管見の限り見当たらなかった。

そこで本研究では、中国の大学における中国語を母語とする高学年日本語学習者を対象に、アンケート調査とインタビュー調査を通じて、その具体的な理解プロセスを調べた。

その結果、学習者は主にオノマトペに含まれるある音から、音の似ている中国語の象声詞を手掛かりにしたり、ある音から別の日本語の語や中国語の語を連想したり、音に対して抱くイメージから、対象物や対象物の状態などを連想して意味を推測していることが分かった。

#### **王 添霖（オウ テンリン）「中国語を母語とする日本語学習者のプロソディ・シャドーイングがアクセントの産出改善に及ぼす効果」**

本研究の目的は、プロソディ・シャドーイング練習が中国語を母語とする日本語学習者のアクセント改善にもたらす効果を検証することである。

先行研究では、シャドーイング練習が日本語の学習者のアクセントの改善に対する効果があると論じてきたが、ほとんどの研究のシャドーイング練習の実施時間が 1 学期間から 1 年間までとなり、シャドーイング練習がアクセントの改善の主な原因だと考え難いと思われる。また短期的（10 日間）な研究では、毎日の練習内容とテスト材料の内容が同一であることが見られ、他の文脈においても、改善が見られるかどうかは考えにくいと思われるため、本研究ではシャドーイングの練習用材料とテスト用材料をそれぞれ作り、10 名の中国語日本語学習者を対象に、5 日間のシャドーイング練習を実施した。結果、プロソディ・シャドーイング練習はある程度の聞き取り能力のある学習者にとってアクセントの改善効果があるとわかった。

**村川 永（ムラカワ ハルカ）「職場における異文化適応に影響を与える要因の分析—南米出身移住労働者と日本人上司へのインタビュー調査をもとに—」**

本研究は、日本語能力の低い南米出身移住労働者が職場においてどのように異文化に適応しているのか、また、適応に影響を与える要因は何かを主にインタビュー調査によって明らかにし、質的に分析することを目的とする。調査協力者は南米出身移住労働者 2 名とそれぞれの日本人上司である。分析の結果、彼らの真面目に仕事に取り組む姿勢、ホスト側である日本人の外国人に対する態度などが南米出身移住労働者の適応に影響を与えていること、日本人も外国人と接することを通して異文化に適応するようになり、それが外国人側の適応を促進していることが明らかになった。また、母文化で築いてきたアイデンティティと異文化環境下での自分自身のあり方との乖離は適応の阻害要因になるものの、異文化環境に留まる必要性がある場合、南米出身移住労働者は何とか日本に適応する方法を模索するということが判明した。

**高田 光嗣（タカダ コウジ）「レベル差のある日本語クラスにおけるピア・ラーニングの授業デザイン」**

本研究では、日本語能力のレベル差のあるクラスにおいて、ピア・ラーニングのジグソー法を応用した授業をデザイン・実践し、そこから得られたデータの分析によって、ピア・ラーニングがレベル差に起因する諸問題の解消に有効であることの実証を試みた。日本語学校の中級後半クラスの学生 13 人を対象にピア・ラーニングを実施し、2 つのグループから得られた会話データ、授業後アンケート、フォローアップ・インタビューの内容を分析した。分析の結果、1 つのグループではグループ内の全ての学生が積極的に発話し、協働が促進されていた。しかし、もう一方のグループでは協働がうまく促進されなかったという結果が得られた。その要因を考察すると、協働が促進されるためには、レベル差に配慮した活動を設定するだけでなく、「他者への発話の促し方」「進行調整の方法」「教師の介入」という 3 つの点から適切に授業をデザインする必要があるということが分かった。

**胡 娜（コ ナ）「中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」と「必ず」の習得に関する一考察」**

本稿では、調査紙調査によって、中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」「必ず」の習得実態を考察し、中間言語の発達という視点から、日本語母語話者と比較しながら、「きっと」「必ず」の使用傾向を、習熟度別、学習環境別に分析してきた。調査の結果、日本語学習者の産出を分析したところ、日本語学習者は「きっと」「必ず」の使い分けにおいては、特に文末の共起制限がある用法で日本語母語話者と異なる産出傾向が観察された。また、学習者の習得に影響を及ぼす要因を分析したところ、中国語「一定」からの影響、また学習環境および日本語習熟度からの影響が見られた。さらに、調査は短文作成問題と

選択式問題という 2 種類のタスクを実施したが、タスク形式の違いによって正誤率のずれが現れている。最後に、結果や考察から考えられる日本語教育への示唆にも言及した。

### **ラーソン ベンジャミン フィリップ「タンデム学習に対するビリーフに関する一考察」**

本研究ではタンデム学習に対するビリーフを把握するためのアンケート調査を作成し、実施した。調査の対象は東京外国語大学で LETS という学生団体によって行われているタンデム学習の参加者である。この調査は全 3 回、2 学期にかけて行い、そして延べ 178 の回答を得た。LETS の参加者は通常 TUFs で日本語を学習している外国人学生 (JL) と TUFs で外国語を専攻している日本人学生 (JS) である。

JL と JS の回答者は両方ンデム学習でスピーキング・リスニングというスキルを上達させられるという期待を抱いた参加者は多く、ライティング・リーディングというスキルを上達させられる期待を抱いた参加者達は少なかった。互いの学習を支援する志向も、そして自律的な態度も示した。少数の回答者は教室外での学習の有効性に対して疑問を表した。

タンデム学習に関するビリーフの項目に加えて、筆者は自己能力評価とタンデム学習での学習目的の項目も調査票に入れた。自己能力評価と学習目的を比べると、関連性が殆ど見られなかった。一方で、タンデム学習に対する期待とタンデム学習での学習目的の関連性が強かった。

### **姫 子云 (キ シウン)「とりたて助詞に関する一考察—中国人日本語学習者の使用実態を通して—」**

本研究では、日本語におけるとりたて助詞「だけ、ばかり、しか、も、まで、さえ、でも、くらい、など、こそ、は」を研究対象とし、中国人日本語学習者がこれらのとりたて助詞をどの程度に習得しているかをアンケートで調査した。アンケートは中国国内の中国人学生 85 人に実施し、彼らが日本語のとりたて助詞の使用においてどのように間違いやすいかを調べ、その原因を分析した。また、中国での日本語教科書におけるとりたて助詞の扱われ方を検証し、誤用との関連を考察した。調査の結果、和らげのモ、極限のデモ、ダケナラ／ダケデモ、格助詞との接続 (例：買い物ニデモ) において正答率が低かった。これらは中国語との構造的・意味的違い、日本語学習での未習などが原因と考えられる。それゆえに、中国人日本語学習者に中国語と日本語の差異を認識させ、どのようにして中国人日本語学習者に対する日本語教育に導入させていけばいいかを考えていくことが肝要である。

### **喬 雲 (キョウ ウン)「呼称における日中対照及び待遇機能」**

本研究では、中国人日本語学習者 (以下「学習者」) を対象とし、日本人との接触場面において呼称に関してどのような誤用が現れるのか、そしてその誤用は母語とどのような関



わりがあるのかを分析し考察する。研究方法は、日本語における呼称の使われ方について学習者が正しく知っているか調べるため、38名の中国人対象者にアンケート調査を行った。

アンケート調査を分析した結果、被験者の日本語呼称の使用について正用率は高い、あるいは、彼らの日本語呼称の使用傾向が日本人母語話者に近いことが分かった。そして日本語の学習年数が多くなるにつれて、正用率も高くなる。しかし、37%の被験者が日本人母語話者に呼ばれた時に違和感を覚えた、あるいは失礼な感じがしたことがあると答えている。そして 61%の被験者が日本語の呼称の使い方について困ることがあると答えている。その原因について分析する。

#### 顧 天一（コ テンイチ）「複合辞の一語性について—生成文法のアプローチから—」

(1) の下線部の「に従って」は、従来の日本語研究では複合接続助詞として分析されることが多い。

(1) 時代が発展するに従って、生活が豊かになった。

しかし、複合接続助詞として分析すると、2つの欠点が出てしまう。(2)と(3)に示しているように、まず、『に従って』構文ではガノ交替が起こり得る」、それから、『に従って』の直前に『の』が入る」、この2つの事実については説明できない。

(2) 時代(が・の)発展するに従って、生活が豊かになった。

(3) 時代が発展するのに従って、生活が豊かになった。

一方、筆者の提案する空代名詞「 $\phi$ 」によって、「に従って」をめぐる文法現象をうまく説明できるようになる。

(4) 時代が発展する  $\phi$  に従って、生活が豊かになった。

「に従って」の直前に空代名詞を設ければ、なぜ「発展する」が連体形で来ているかはもちろん、空代名詞によって連体修飾を成すため、ガノ交替も説明できるようになる。

#### 蔡 愛蓮（サイ アイレン）「漫画作品における日本語オノマトペの形態上の特徴とその中国語訳について」

日本語非母語話者が日本の漫画ストーリーを翻訳する際に、様々な障害にぶつかるが、その中でも一番問題となっているのは絵と台詞とは別に漫画背景に現れる擬音語や擬態語などのオノマトペをいかに理解することである。本研究は品詞分類や句構造などの中国語文法を取り入れ、統語的機能の着眼点を用い、擬音語と擬態語の中国語訳手法を分析し、拘束型形態素、一単語、句、文の四つの言語単位での対応が可能だと解明した。品詞性の観点から、中国語オノマトペに当たる「象声詞」での対応以外に、様態副詞の役割を担うオノマトペをその語が修飾する動詞や動詞句、副詞の修飾を受ける形容詞や形容詞句に翻訳することができる。擬態語は単語以外に、句での対応が多く、様々な句構造のうち、動作や状態とそれらがどのように行われているかの両方を描写できる述語補語構造及び偏正構造の動詞句・形容詞句は原文擬態語の持つ意味性質を一番再現できると主張する。

## デ ナザレ フィゲイラ フラヴィオ「日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語にどのように翻訳されるか」

本研究はブラジル・ポルトガル語へ直接に翻訳された日本の人気少年漫画の作品を分析データとし、日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語への翻訳に対応されているかどうかを考察し、更に、その対応が具体的にどのような手法のもとで行われているかを分析した。

「役割語」の分析を行うために、原作に見られる全キャラクターのセリフ及び原作のセリフに相当する翻訳作品のセリフが収集され、データベースが作られた。データの考察から、対応されていると見られた「役割語」の種類は「田舎ことば」、「異人ことば」、「男ことば」、「女ことば（おネエことば）」であり、日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語の翻訳に様々な語彙的や文法的な特徴などによって対応されていることが明らかにされた。

今後の課題として、ブラジル・ポルトガル語への翻訳に見られる「役割語」の対応の様相をより体系的に考察するために、更に幅広いジャンルの作品を対象とする調査が必要とされる。

## 陳 麗婷（チン レイテイ）「漱石文学における家族関係」

周知のように、漱石は両親に縁の薄かった作家である。しかし、その作品に現れる家族に対する関心が同時代の作家と比べると圧倒的に高い。その里子時代の家庭生活に対する実体験が『道草』に描かれており、ほかの作品にも、登場する主人公たちと家族との関係は、作品の主題と深く関連し、大きく機能している。したがって、漱石の作品における家族関係を探求することは、漱石文学を正確に理解する上での重要な鍵であると考えられる。漱石が作品に取り扱ったのは、日本の近代化の中で「家族」が変わっている時代である。本論は漱石の作品に描かれる家族関係を親子関係、兄弟関係、夫婦関係に分け、漱石の＜家＞の実体験を繋ぎながら、当時の家制度を踏み、漱石の＜家＞に対する認識、その描かれた家族関係に表現したいものを探求した。

## 李 侑桓（イ ユファン）「大岡文学に表れる闘争と悲劇—その相対的存在を廻って—」

本論文では、戦後派作家大岡昇平の作品の中で表れる日常と非日常の側面についての分析を通して、作者と作中の人物が持つ特性と思想について一つの解釈を引き出すことを目標にしている。これまでの戦後小説に対する分析から離れて、大岡が持つ特性を既存の日本文学における私小説的特徴とフランスの心理主義文学的叙述法から受け継がれたものであるとし、特に注目する部分として作中で描かれた舞台の反転と思想的対立から起因する作家の一貫した主題を調べ、そこから表れる文学的思想と作者の根本的姿勢に対する考察を行う。本稿では戦争を描いた作品と日常における人間の心理とその推移を描いた作品についての分析を進め、同時にその文学観形成に多大な影響を与えたフランスの作家スタン

ダールとの関連性を論じ、作家の独特な文体と執拗に明晰を追求する叙述法から読み取れる明瞭さとあいまいさ、日常性と非日常性の関係に対する定義を行うことにしている。

### 李 黙存（リ モクゾン）「漱石前期作品における現実世界と「彼岸的世界」—『草枕』までの作品を中心に—」

漱石の前期創作には現実世界を捉え、現実と向き合おうとする志向を表す作品と、現実世界の反対側にある幻想的で生き得ないゆえの「彼岸的世界」を描く作品という二つの傾向のせめぎ合いが見られる。留学以前の創作に描かれる「仙郷」は「彼岸的世界」の表現である。しかし単なる現実世界からの脱却と「我」という自己意識から解放する脱俗への憧れではなく、現実的認識の一面も表している。留学を境に漱石の現実志向が強まる。現実世界を捉える「写生」は、「我」の意識を中心とする特徴の背後に『文学論』との繋がりがある。諧謔的な写生文は人物を国家の寓意を担わせて登場する現実志向が強い一方、脱俗的傾向も見られる。ほぼ同期の『草枕』の「非人情」は「我」からの解放であり、脱俗的な「彼岸的世界」を描く作品であるが、最後に連載終了後の現実志向を表す書簡と同じ傾向が見られ、『草枕』は「彼岸的世界」を描く最後の作品になる。

### 黄 棠棠（コウ トウトウ）「村上春樹作品における動物の表象—鼠、羊と象を中心に—」

本論は三章に分けて村上春樹作品における「鼠」、「羊」と「象」の表象を考察した。

第一章では、「鼠」の名前を持たないことから始まり、動物としての「鼠」の名前の由来を日本古典文学の説話を考察した。そして村上春樹の鼠三部作を取り上げ、大江健三郎の『万延元年のフットボール』と比較し、「鼠」は「僕」の 60 年代への情念の担い手であると論じてみた。

第二章は「羊」に関する先行論分析し、その宗教性と時代性に注目した。最後は『羊をめぐる冒険』と『ダンス・ダンス・ダンス』を取り上げ、「羊」が情報のメタファーであると考察した。

第三章では、「象」の「思想」、「国家の論理」と「情報」である表象の分析で始まる。その後は『踊る小人』、『象の消滅』と『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』に着目し、情報社会に置かれる個人の「自我」の生き方を主題として論述してみた。

### アントネッラ モルジッロ「戦後詩誌における「権」と詩人茨木のり子—戦争から造形された女性詩人—」

日本の詩は二十世紀にわたって大きく変わってきた。特に、第二次世界大戦後に書かれた詩が特別な形をとっており、当時の出来事の反映として見なすことができる。戦争の敗北によってその世代の詩人たちの間に異なっている反応があった。人間に対して反発的な気持ちを覚え始めた詩人とともに、詩を通して戦争の酷さを乗り越えられることを信じていた詩人もいた。戦後詩壇の特徴の中で詩誌の創刊はその一つである。日本では戦後中に

もっとも評判になった詩誌は「荒地」、「列島」、「櫛」である。本論文では「櫛」という詩誌の発展と特徴に注目されながら、戦後における詩人茨木のり子の活動と詩作が紹介されている。特に、『櫛』詩誌と茨木のり子の関わりに目を向けながら、戦争の体験はどういう風に茨木のり子の詩作法に影響を与えたのかということが勉強されている。

### 張 洋子（チョウ ヨウコ）「日本人はどのようにユーモアを語るか—『わたしのちょっと面白い話コンテスト』をもとに—」

文化に関わらず、人が気持ちよく交流する際に使われる手段の 1 つとしてユーモアが挙げられる。本研究は、異種の組み合わせによる不適合が笑いを生起させると指摘している「不適合理論」を取り上げながら、「わたしのちょっと面白い話コンテスト」の中から抽出した日本人による 220 作品を分析データとし、話の「対象」、「形式」、「構造」及び「言語的特徴」について分析を行った。

その結果、「対象」において、他人を笑う話が多めで、「形式」において、96.82% が個人の経験談などが見られる「ナラティブ」の形式となっていることが分かった。また、「ナラティブ形式」の作品の構造を分析した結果、パンチラインで話を終わらせる作品が非常に少なく、その代わりに、パンチラインが終わった後でも情報を続けて提供している作品が多いことが分かった。最後に、不適合を予告する重要な役割を果たす「たら」と、聞き手に未知の情報を認識させようという話し手の心的態度を反映した「のだ」が、日本語母語話者がユーモアを語る際に目立つ言語的特徴であることが明らかになった。

### 左 白楊（サ ハクヨウ）『させられる』述語文の意味と構文—人主語を中心に—

従来、「させられる」述語文の使役受動文を中心として主に被役と誘発という 2 つの意味があると指摘されてきた。しかしながら、「させられる」述語文のほかのタイプの文の意味及び構文特徴については、ほとんど明らかにされていない。

本研究は BCCWJ から抽出したデータのうち、人主語の「させられる」述語文を対象とする。「させられる」形を「させる」と「られる」が組み合わされたものだと考え、「させられる」述語文タイプの異なる意味、異なる構文を分析した。

具体的には、「させられる」述語文を大きく使役受身、使役可能、尊敬に分類した。この 3 つの大きなタイプを 3 大分類と呼んでいる。さらに、下位の分類として、使役受身を強制の受身、許可・放任の受身及び原因の受身に、使役可能に強制の可能、許可・放任の可能、放任の可能に、尊敬に強制の尊敬及び二重尊敬に細分類し、全部で 8 つの細かいサブタイプを立てた。

**邱 顯峻（キュウ ケンシュン）「第二言語不安から見た遠隔外国語教育—台湾の仮想教室型授業を対象に—」**

学習者にとって、オンラインと教室という 2 つの授業環境において不安の度合いは異なるか—これが、本研究の最大の焦点である。したがって、本稿の目的は、教育環境の違いを不安の側面から捉え、教室と遠隔教育における不安の実態を明らかにすることにある。

本稿では、台湾の遠隔外国語教育を経験する学習者と教師 109 名を対象に、不安の実態を実証的に分析した。結果、学習者の不安は教室および遠隔という 2 つの教育環境によって異なり、遠隔教育環境には教室より低いレベルの不安を感じると考察できた。さらに、その要因に「他者との関連」というキーワードが 1 つ決定的な要素であると論じられた。

これまで、遠隔教育はその利便性に注目が集まっており、習得に関する討論はほとんど見られない。本稿では、不安の観点から遠隔教育における第二言語の習得にかかわる利点を論じた。これは、学習者が教育環境を選択する際に考慮すべき 1 つ有益な情報となりうると考えられる。そしてまた、本研究の意義でもある。

**汪 丹丹（オウ タンタン）「中日大学生による依頼メールの機能的要素の相違点—評価からみた丁寧さと、要素の有無・提示順の関係について—」**

本研究は、面識がない目上の相手にメールで依頼を行うことを取り上げ、中国人日本語学習者と日本語母語話者各々が書いたメールの文章を「機能的要素」という観点から分析することにより、それがメールの丁寧さやメールの文章構造にどのように影響するのか、また、中国人日本語学習者と日本語母語話者による違いを明らかにし、日本語教育における依頼メールの書き方指導の際の注意点を導いた。これまであまり取り上げられてこなかった「恐縮表明」と「自己紹介」、「依頼予告」という「機能的要素」に注目し、調査結果を分析したところ、中日協力者の使用意識については、共に『「恐縮表明」から『自己紹介』のほうが丁寧』という回答が最も多かったが、使用実態には相違が見られた。また、「依頼予告」についても書いた方がいいとの回答が多かった反面、実際に書いた人数は少なく、これらの点をメールの書き方指導の際の注意点として導くことができた。

**孫 蕊（ソン ルイ）「平安朝における隠遁思想の受容と変容—都良香・紀長谷雄と橘在列を中心に—」**

本稿では、都良香・紀長谷雄・橘在列という平安初期から平安中期まで三人の官僚文人の詩文を、時代背景をあわせて考察し、彼らの隠逸志向に関するいくつかの問題を検討した。日本の隠逸思想は中国から受容した後、日本の特有な風土と当時代特定の政治背景とを融合し、その自国性と特定政治性が反映されていると思われる。本論は、序章では、中国隠逸思想の歴史的な流れおよび平安朝における中国隠逸思想の受容について概説した。第一章では、良香の神仙・隠逸思想に注目し、彼の詩文が中国の「山水記」・「名山記」さらに老荘思想との関連性を考察し検討したのである。第二章では、長谷雄が生きていた時

代の政治状況を合わせて、詩人と官吏としての長谷雄における身分的な二重構造からその隠逸志向に対する心の葛藤を分析してみた。第三章では、橘在列の境遇と当時摂関政治という社会状況を考察しつつ、『扶桑集』における橘在列・源英明の一連の唱和詩を中心に、その詩境に現れた隠逸志向が如何なるものかを明らかにしようとした。終章では検討してきたところを纏めたうえで、平安朝隠逸思想における後世への影響と、今後の課題についても展望してみたのである。

2017 年度卒業論文・卒業研究題目  
List of B.A. Theses/Projects 2017-2018

氏 名	指導教員	論 文 題 目	備 考
<b>言語文化学部 言語・情報コース</b>			
パ ト リ シ オ バ レ ラ ア ル ミ ロ ン	風間伸次郎	口語シンガポール英語における重複法について	*
飯 田 大 貴	風間伸次郎	AAVE における done 形と標準英語における have + p.p. 形との対照研究	*ロシア語
池 田 安 奈	風間伸次郎	トルコ語における擬態を示す重複表現について—日本語における類似研究を元に—	*トルコ語
植 島 一 輝	風間伸次郎	茨城県東南部地域におけるアクセントとイントネーションについて	*ロシア語
上 杉 晃 彬	風間伸次郎	トルコ語 ki の導く補文節に先行する述語	*トルコ語
葛 西 麻 祐 子	風間伸次郎	日本語授受動詞の補助動詞用法における相互承接について	*ポルトガル語
キ ム ゴ ウ ン	風間伸次郎	英語からの借用要素から構成された韓国の新造語について	*
清 水 一 樹	風間伸次郎	タガログ語の被行為者焦点動詞について	*フィリピン語
ト ウ テ ン リ ュ ウ	風間伸次郎	南琉球宮古語池間方言における主題助詞 =giaa について	*
中 尾 歩 美	風間伸次郎	ロシア語における不定詞の体—願望を表す名詞との結合について—	*ロシア語
東 山 彩 加	風間伸次郎	タイ語における可能を表す助動詞 dây の出現環境について	*タイ語
武 藤 紳 介	風間伸次郎	現代日本語における副詞「全然」について	*ロシア語
荒 武 春 菜	早津恵美子	外来語名詞の分類—和語/漢語との使い分けから—	*
石 井 佐 弥	早津恵美子	新語『ほぼほぼ』について—語の持つ意味とかかる品詞の関係性から—	*ポルトガル語
細 谷 美 帆	早津恵美子	送り仮名を付けない転成名詞の表記—動詞の意識の書き分けと複合語の表記—	*
光 本 彩 伽	早津恵美子	謙譲表現「させていただく」の用法について—上接する動作に着目して—	*イタリア語

八 木 はるか	早津恵美子	日本語オノマトペと日本語教育について—オノマトペの持つ多義性、それに伴う語彙教育の観点から—	*
渡 邊 桃子	早津恵美子	授与補助動詞構文における利益の受け手の表現方法	*フランス語
<b>言語文化学部 グローバルコミュニケーションコース</b>			
青 木 友香	阿 部 新	日ロバイリンガルの子どもたちの言語発達の現状—作文調査を通して—	*ロシア語
今 田 詩衣香	阿 部 新	日韓国際結婚家庭の言語選択要因	*朝鮮語
八 木 はるか	阿 部 新	吉本ばなな作品のイタリア語訳における特徴と優位性の考察—『TSUGUMI』の英語、イタリア語訳比較をもとに—	*イタリア語
田 口 大希	阿 部 新	高等学校国語教科書リライト教材の作成—中国語母語話者を対象として—	*中国語
橋 本 実穂	阿 部 新	漢越語を利用した漢字教材	*ベトナム語
西 晶子	阿 部 新	ベトナムにおける外国語教育としての日本語教育—メディアから読み解く現状と課題—	*ベトナム語
篠 田 千暁	海 野 多枝	留学による日本語学習意欲の変化—3 名の中国人日本語学習者の場合—	英語
嶋 崎 理沙	海 野 多枝	The Identities of Japanese-English Bilinguals in Japanese International Schools	マレーシア語
土 屋 春佳	海 野 多枝	台湾人にとっての日本語の位置づけ	中国語
永 井 舞美	海 野 多枝	日本語の独習について—ライフストーリー・インタビューとディクテーションノートの考察から—	*
リ イカ	海 野 多枝	アイデンティティの変化が学習動機に及ぼす影響について—中国朝鮮族日本語学習者の日本語使用におけるアイデンティティ変化の考察から—	*
前 田 みなみ	谷 口 龍子	接触場面における日本人ポルトガル語学習者とブラジル人ポルトガル語母語話者のあいづちの異同—より適切なあいづちとは—	*スペイン語
今 野 佑理	谷 口 龍子	「外国、外国人関連番組」における外国人の発話吹き替えにみられる特徴—役割語を中心に—	*マレー語
皆 吉 莉帆	谷 口 龍子	サッカー中継における実況・解説の談話分析—誰がどこの味方をするのか—	*モンゴル語



＜彙報＞2017 年度卒業論文・卒業研究題目

浅 田 麻 由	谷 口 龍 子	日本人の英作文に見られる特徴と誤用—なぜ日本人だと分かるのか—	*英語
<b>言語文化学部 総合文化コース</b>			
金 子 明 以	柴 田 勝 二	夢見たダツラ	*朝鮮語
島 田 雅	柴 田 勝 二	『花より男子』に見る韓国ドラマの非現実性	*朝鮮語
内 藤 淳	柴 田 勝 二	川端康成と淋しさの文学	*中国語
奈良橋 大輔	柴 田 勝 二	谷崎潤一郎と野生—『細雪』再考	英語
バ ク ジ ウ	柴 田 勝 二	小説『女優』	*
橋 本 由 佳 子	柴 田 勝 二	「泣きて後の冷笑」から考える樋口一葉	モンゴル語
本 間 笑 子	柴 田 勝 二	三島由紀夫『仮面の告白』論 主人公の語り	*ラオス語
水久保 ちあき	柴 田 勝 二	小説『美也子の遺書』	*ロシア語
張 念 曦	村 尾 誠 一	『万葉集』における大伴家持の恋歌に関する研究	*
尹 惠 仙	村 尾 誠 一	『源氏物語』から見る薫の人物像—恋と道心を中心に	*
古 島 野 乃 香	村 尾 誠 一	今昔二つの男女入れ替わり物語—『とりかへばや物語』と『君の名は。』—	中国語
<b>国際社会学部 地域社会研究コース</b>			
麻 野 智 史	米 谷 匡 史	日本における子どもの貧困と学習支援—ボランティアとして携わる大学生の声にみる学習支援の成果と課題—	*
イ ドンヒョン	米 谷 匡 史	2015 年慰安婦合意から考える日韓関係—植民地支配の未清算と被害者の排除の問題—	*
イ ミンチュ	米 谷 匡 史	在日文学の女性像	*
シ ョ ウ リ カ	米 谷 匡 史	上海日本人学校の教育方針とその役割の変遷から見る日中関係	*
松 井 俊 輔	米 谷 匡 史	「kamikaze」が意味するものとは？日本とフランスの相違—2015 年 11 月 13 日のパリのテロ報道から—	*英語
山 根 裕 史	米 谷 匡 史	技能実習法による制度の変化と外国人受け入れの将来について	*フィリピン語

\*については、p. 163 以降に卒業論文要旨を掲載

・備考欄の言語名は所属する専攻語を表す（空欄の場合は日本課程日本語専攻の学生）

2017 年度卒業論文・卒業研究要旨  
Abstracts of B.A. Theses/Projects 2017-2018

**パトリシオ バレラ アルミロン「口語シンガポール英語における重複法について」**

本稿は口語シンガポール英語における品詞(CSE)ごとの重複について考察を行った。まずはインターネットから CSE の例を収集し、先行研究と比較した。アンケート調査を用いて、形容詞の重複には、CSE の基層言語である閩南語と似た制限があるか否か検証した。重複した動詞には現在分詞の重複が見つかった。さらに、重複した動詞の無標な統語環境が分かった。最後に新たに見つかった CSE の重複について考察した。

**飯田 大貴（イイダ ヒロキ）「AAVE における done 形と標準英語における have + p.p. 形との対照研究」**

本稿では AAVE において、現在完了形と同様な意味をもつアスペクトマーカである done 形をアメリカ標準英語の have + p.p. 形と比較し、両者の間での用法の違いを解明することを目的とした。非標準形での継続用法の有無を調査 1、非標準形の出現状況の考察を調査 2 とした。結果、AAVE において、非標準形と標準形は相補的に用いられていることが判明した。

**池田 安奈（イケダ アンナ）「トルコ語における擬態を示す重複表現について—日本語における類似研究を元に—」**

本稿ではトルコ語における「名詞を重ねて擬態を示す重複表現」について考察を行った。まず品詞に焦点を当て、先行研究における用例の分類およびインタビュー調査を行い、「名詞を重ねる重複表現」は存在し、そのうち辞書等に載っていないにもかかわらず許容される例があると突き止めた。アンケートでより多くの語・人を対象に許容度を検証した。第二インタビューではアンケートの結果、同時に「擬態」という意味にも焦点をあてて考察した。

**植島 一輝（ウエジマ カズキ）「茨城県東南部地域におけるアクセントとイントネーションについて」**

本稿は、東京式アクセントと無アクセントが併存する茨城県東南部地域においてアクセントとイントネーションの調査・分析を行った。まず、茨城県東南部の旧神栖町において若年層から老年層までのインフォーマントを対象に調査を行い、当該地域のアクセントの世代差を明らかにした。次に、茨城県東南部地域のより広い範囲で老年層の話者を対象に同様の調査を行い、当該地域のアクセントの地域差とイントネーションを明らかにした。

**上杉 晃彬（ウエスギ テルアキ）「トルコ語 ki の導く補文節に先行する述語」**

本稿では、トルコ語において補文節を導く ki に先行する述語を対象とし、コーパス調査

を用いて、その意味分布を明らかにした。

先行研究における、補文節を取る述語の類型に基づいて、調査で得られた例を分類した結果、発言系が半数弱を占め、思考系、知覚・発見系、願望系、感情系と割合の大きい順に続いた。更に、得られた例文内の **ki** を機能別に分類したところ、先行研究には見られない、**ki** が文頭に現れる用法が確認できた。

#### **葛西 麻祐子（カサイ マユコ）「日本語授受動詞の補助動詞用法における相互承接について」**

本稿は、日本語の動詞複合体のうち、授受補助動詞が相互に承接した形式について考察を行った。授受動詞が 2 つ相互に承接した動詞複合体をコーパスから抽出し、7 つの授受動詞がいかなる順序で承接できるのか明らかにした。そこから各形式ごとの意味機能の違い、参与者の格表示、参与者を項で明示する割合、用法などを明らかにした。同じ系列の授受動詞が相互に承接する用例や、授受動詞が 3 つ承接する用例も見つけることができた。

#### **キム ゴウン「英語からの借用要素から構成された韓国の新造語について」**

本稿では韓国国内で使用されている韓国語において、外来語、その中でも英語からの借用要素から構成された新語について調査し、分析した。韓国の国立国語院に新語データを要請し、得られた 2012 年度から 2016 年度の単語リストを用いて調査を行った。国語院のデータには海外からの単純借用語が含まれているため、それを除き、韓国で新しく組み立てられた単語だけを対象とした。それを基に、英語から借用されて作られた単語を品詞、造語法、結合形態に従って分析し、結果をまとめた。

#### **清水 一樹（シミズ カズキ）「タガログ語の被行為者焦点動詞について」**

本稿ではタガログ語の IN 動詞に着目し、コーパスを用いて構文パターンとその割合を調査した。その中で主格の被行為者名詞句と属格の行為者名詞句のどちらもとる構文が最も多く最も基本的な構文であることを確認し、IN 動詞の他動性の高さについての考察も行った。ある種の IN 動詞には属格の行為者名詞句が現れないものがあつた。方向焦点動詞のような IN 動詞はまれに見られ、2 つの焦点動詞の間の「揺れ」であると考察した。

#### **陶 天龍（トウ テンリュウ）「南琉球宮古語池間方言における主題助詞 =gjaa について」**

本稿では、宮古語池間方言の主題助詞 =gjaa について、4 つの共時的な調査をしてから、通時的に =gjaa の語源を考察する。共時的な調査では、I. =gjaa の出現環境、II. =gjaa の焦点・否定との共起、III. =gjaa とほかの 2 つの主題助詞 =a と =baa との使い分け、IV. 数量詞・副詞のあとに現れる=gjaa を考察し、通時的な調査では、調査 I から調査 III をもとにして、池間方言の =gjaa の語源を考察し、なぜ =gjaa が =baa に取って代わったのかについて説明を試みる。

**中尾 歩美（ナカオ アミ）「ロシア語における不定詞の体—願望を表す名詞との結合について—」**

本稿では *želanie* との結合における不定詞の体について、コーパスを用いて 3 つの調査を行い、その特徴と傾向を分析した。調査Ⅰで *želanie* の「動作実現の志向」によって完了体が多く選択されることを確認した。次いで調査Ⅱでは願望の存在が否定される場合をいくつかの形式ごとに分析し、願望からの視点移動が容易であるほど不完了体を選択されやすいのではないかと考えた。調査Ⅲにおいては動詞語彙ごとに体選択の偏向性の分析を試みた。

**東山 彩加（ヒガシヤマ アヤカ）「タイ語における可能を表す助動詞 *dây* の出現環境について」**

本稿はタイ語においての可能表現の一つである助動詞 *dây* について、主にコーパスを用いて考察したものである。まず先行研究の分類方法に応じてインフォーマントの協力のもと *dây* を分類した。その後、*dây* の前後に出現する動詞を集計し、その傾向を考察した。同時に、他の可能表現 *pen*、*w a y* についても比較対象として共起する動詞を考察した。*dây* の前後に出現した動詞の傾向から、*dây* の用法をさらに明確にすることができた。

**武藤 紳介（ムトウ シンスケ）「現代日本語における副詞「全然」について」**

本稿では、現代日本語における「全然」がどのような述語と共起しているのかを調査した。「全然」を含む用例を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から抽出し、各用例を先行研究にならない分類し、観察していった。調査媒体は新聞、雑誌、書籍、国会議事録、Yahoo! 知恵袋、Yahoo! ブログである。特に「明示的比較形式」を伴う用例と「全然」で終止する用例に着目し、現代における新しい「全然」の用法をより明確にすることができた。

**荒武 春菜（アラタケ ハルナ）「外来語名詞の分類—和語/漢語との使い分けから—」**

最近では「外来語の氾濫」と言われるほど多数の外来語が使用されるようになっているが、外来語の使われ方にも多様なものがある。そこで、日常で比較的良好に使用される外来語名詞を、単独で使われる語と単独では使われない語の二つに分け、それぞれの外来語が意味の類似する和語/漢語とどのように使い分けがされているかという観点から特徴を考察し、分類を行った。

**石井 佐弥（イシイ サヤ）「新語『ほぼほぼ』について—語の持つ意味とかかる品詞の関係性から—」**

本稿では、新語「ほぼほぼ」について、「ほぼほぼ」が修飾する語の品詞や文章中の使われ方から意味と用法を調査した。その結果、「ほぼほぼ」には副詞的用法と名詞的用法があることがわかった。副詞的用法はさらに 3 つの意味に分類でき、またその用法内では「ほ

ぼほぼ」がかかる品詞の性質にある程度の共通性も見いだせる。名詞的用法は副詞的用法から発展し、格助詞や断定の助動詞を後節して用いることができることがわかった。

**細谷 美帆（ホソヤ ミホ）「送り仮名を付けない転成名詞の表記—動詞の意識の書き分けと複合語の表記—」**

通常、活用のある語から転じた名詞の送り仮名は、もとの語の付け方によって送るが、「氷」、「話」、「組」などのように例外的に送り仮名を付けない語もある。本論文ではコーパス調査と大学生を対象とした書き取り調査を通して、こういった語に生じる送り仮名表記のゆれの実態調査を行った。さらにそのゆれが生じる要因を、「動詞の意識」の有無と、「複合語」へのなりやすさやその構成という二つの観点から考察した。

**光本 彩伽（ミツモト アヤカ）「謙譲表現「させていただく」の用法について—上接する動作に着目して—」**

謙譲表現「させていただく」が持つ意味を、現代日本語書き言葉均衡コーパスから収集した例をもとに調べた。その結果、上接する動作によって話し手が利益を与える場合は動作を低く述べる意味を持ち、反対に話し手が利益を受ける場合には話し手が受け取るものや利益の与え手を高める意味を持つということが分かった。

**八木 はるか（ヤギ ハルカ）「日本語オノマトペと日本語教育について—オノマトペの持つ多義性、それに伴う語彙教育の観点から—」**

日本語オノマトペ教育において、音と意味の有契性が強い、動物の鳴き声を表す語から導入することを検討した。その中で、鳴き声以外の音や様子も表す多義的な語があることに着目した。本稿では「ワンワン」「ブーブー」「キーキー」の母語話者の使用実態における、語の多義性と統語的な特徴について分析した。分析結果と、多義性が扱われにくい日本語オノマトペ教育の現状を受け、多義性に着目したオノマトペの指導法を提案した。

**渡邊 桃子（ワタナベ モモコ）「授与補助動詞構文における利益の受け手の表現方法」**

「一てやる」「一てくれる」などの授与補助動詞は、本動詞として用いると、物品の移動の着点として二格を伴う。一方で、補助動詞として用いる場合、「妹に勉強を教えてあげる。」の「妹に」、「泣いている弟を慰めてやった。」の「弟を」など、利益の受け手（着点）は多様な形で表現される。本稿では、現代日本語書き言葉均衡コーパスより収集したおよそ 300 の用例を、利益の受け手の表現形式別に分類し、それぞれの表現形式が選択される条件を明確にした。

**青木 友香（アオキ ユカ）「日ロバイリンガルの子どもたちの言語発達の現状—作文調査を通して—」**

日本国内で日本語とロシア語の複言語環境で育つ、日ロバイリンガルの小学生を対象に、日本語とロシア語の作文調査を行った。25 名分の作文を質的に分析した後、学年ごと、そして全体で考察を行った。今回の横断的調査では、書くことに慣れてきてからは、始めは日本語の作文力の方が相対的に優勢になるものの、高学年になるとロシア語も追いつき、さらに認知面においてもレベルが上がる、ということが全体的な傾向として見られた。

**今田 詩衣香（イマダ シイカ）「日韓国際結婚家庭の言語選択要因」**

日本社会の構造的な変化やグローバル化の進行に伴い、国内での国際結婚が増加していると共に、多言語・多文化家庭への支援の拡充が急務となっている。本研究では、日本に居住する日韓国際結婚家庭を対象とし、夫婦間の使用言語選択に関して調査する。そして、言語能力の他に文化・社会的背景が使用言語の選択にどのような影響を与えるか考察し、今後の多言語・多文化家庭への日本語教育支援における問題解決のための展望を探る。

**田口 大希（タグチ ダイキ）「高等学校国語教科書リライト教材の作成—中国語母語話者を対象として—」**

本研究は、中国語母語話者向けに、梶井基次郎作『檸檬』のリライト教材を作成したものである。作成にあたっては、学習者が困難に感じる点を明らかにするため、中国語母語話者にインタビュー調査を行った。その結果、日本独特の語彙の理解を要する情景の理解及び登場人物の心情理解が主な困難であることが分かった。そこで、語彙理解を補助するための図版の使用や、心情を表す語句の抜き出しといった支援策を考えた。

**西 晶子（ニシ アキコ）「ベトナムにおける外国語教育としての日本語教育—メディアから読み解く現状と課題—」**

本研究では、ベトナムの電子版ニュースサイトを用いて日本語教育を始めとする外国語教育全般の最新の動向を掴み、現状と課題を示した。一部小学校における第一外国語としての日本語教育は、ロシア語や中国語と共に国家外国語プロジェクト 2020 の一環として 2016 年に開始された。しかし依然として英語学習を希望する者が圧倒的に多く、課題は多い。今後は学習者の需要を見極め、適した対象校・地域を選定することが重要だ。

**永井 舞美（ナガイ マミ）「日本語の独習について—ライフストーリー・インタビューとディクテーションノートの考察から—」**

本論文は日本語の独習について、ディクテーション活動を通して日本語を学習していた独習者の事例をもとに、日本語はどのように学習されるのか、独習においてどのような学習ビリーフをもち学習ストラテジーを用いるのかを調査したものである。調査対象者のラ

イフヒストリー、ライフストーリー・インタビュー、ディクテーションノートの 3 つを総合的に考察した。

**李 芸花（リ イカ）「アイデンティティの変化が学習動機に及ぼす影響について—中国朝鮮族日本語学習者の日本語使用におけるアイデンティティ変化の考察から」**

本論文は、中国朝鮮族について概観した上で、中国朝鮮族日本語学習者二人に対してライフストーリー・インタビューを行い、その二人の学習者の事例を分析・考察し、アイデンティティの変化が学習動機に及ぼす影響について探ったものである。日本に留学している中国朝鮮族日本語学習者の日本語学習過程及び、日本語使用におけるアイデンティティの変化に着目し、そのアイデンティティ変化に伴った学習動機の変化について考察した。

**橋本 実穂（ハシモト ミホ）「漢越語を利用した漢字教材」**

漢越語と呼ばれる、ベトナム語の語彙で漢字が当てはまる中国語由来の語彙と日本語の漢字語彙の類似性に着目して漢字教材の開発を行った。ベトナム人日本語学習者へのアンケート結果から、「漢字語彙の意味を理解し読むことが出来ること」、「同じ読みの漢字の中から正しい漢字を選ぶことが出来ること」の二点を教材の目標に定めた。教材は漢字の基本的な情報、読み問題と選択式の問題、コラムで構成されている。

**八木 はるか（ヤギ ハルカ）「吉本ばなな作品のイタリア語訳における特徴と優位性の考察—『TSUGUMI』の英語、イタリア語訳比較をもとに—」**

吉本ばななのイタリアでの他国に類を見ない人気の要因のひとつに、翻訳の優良さが挙げられている。この点に着目し、『TSUGUMI』を題材に英語、イタリア語訳の比較をもとにイタリア語訳の特徴と優位性を検証した。英語訳には、原文にない表現を補っている翻訳が多く見られる一方、イタリア語は比較的原文に忠実な翻訳であると分析できた。吉本ばなな独特の文体が大きく反映されている翻訳が、イタリア人読者に魅力的に映ったと考察した。

**浅田 麻由（アサダ マユ）「日本人の英作文に見られる特徴と誤用—なぜ日本人だと分かるのか—」**

日本人の英作文と英語ネイティブの英作文では、根本的にどのような違いがあるのか？という疑問に対し、データを基に語用論的観点を中心に解明した。研究では複数の日本人英作文と英語ネイティブ英作文を分析した結果、日本人の英作文の特徴として名詞的表現の少なさ、無生物主語構文の不使用が見られ、また語用論的な誤用において等位接続詞の誤用、修飾方法の誤用が発見される結果となった。

**今野 佑理（コンノ ユリ）「外国、外国人関連番組」における外国人の発話吹き替えに  
みられる特徴—役割語を中心に—**

近年増加している「外国、外国人関連番組」を視聴していると、登場する外国人の発話吹き替えに違和感を覚える。本稿の目的は、役割語に着目し、その外国人の発話吹き替え文の特徴を明らかにすることである。外国人の発話吹き替え文から役割語に関する要素を抽出し、調査した結果、各番組のコンセプトに深く関わる人物の発話に、工夫された役割語が使用されていることが明らかになった。

**前田 みなみ（マエダ ミナミ）「接触場面における日本人ポルトガル語学習者とブラジル人ポルトガル語母語話者のあいづちの異同—より適切なあいづちとは—」**

日本人ポルトガル語学習者とブラジル人ポルトガル語母語話者のポルトガル語会話におけるあいづちの異同、学習者のあいづちに対して母語話者がもつ印象について、録音調査とインタビューを元に分析した。学習者の方があいづちの使用頻度が高い、共感のあいづちとして頻出した言語形式が学習者と母語話者で異なる、母語話者のみが使用した言語表現がある、学習者のある言語形式に対し母語話者が違和感を感じるなどの結果がみられた。

**皆吉 莉帆（ミナヨシ リホ）「サッカー中継における実況・解説の談話分析—誰がどこの味方をするのか—」**

本論文では、サッカー中継で実況者・解説者がどちらか一方のチームを支持する発言をするのかを究明する。海外チーム同士の試合に焦点を当てて談話を分析し、特定のチームを支持する発言で用いられる発話内容や言語表現から実況者・解説者の心情を考察した。その結果、実況者・解説者は、基本的には強豪チームや優勢チームを支持する一方で、試合展開によっては劣勢チームに対する判官贔屓のような発言をすることが明らかになった。

**金子 明以（カネコ メイ）「夢見たダツラ」**

A 県警の巡査、森と小塚の元に病院で発生した大量殺人事件の報せが入る。その少し前、入院患者であった益田が退院する。目的地まで向かう途中、益田は得体の知れない“怪物”の姿を目にする。元 SAT であった益田は怪物を退治していくが、彼は後にそれらの怪物が自分を追ってきていることに気づき、怪物退治に乗り出す。一方の森と小塚は益田が薬物中毒者であり、彼こそ大量殺人事件の犯人だとし、彼を捜索し始める。

**島田 雅（シマダ ミヤビ）『花より男子』に見る韓国ドラマの非現実性**

日本版『花より男子』が韓国版『花より男子』にリメイクされる際の主な変化として、主に「演出や演技におけるわかりやすさの強調」「リアリティーよりもファンタジーの重視」「激しいシーンは激しさを徹底的に追及」の 3 つを採り上げ、その事例を挙げながら、韓



国ドラマ『花より男子』が韓国で受け入れられる要因と韓国人・韓国社会の思想文化を読み解いた。

#### **内藤 淳（ナイトウ ジュン）「川端康成と淋しさの文学」**

「吉本ばななと村上春樹の初期作品は川端康成の作品に似ている」との言説をヒントに、三者の文学を比較しながら、川端作品はこの二人の現代作家に影響を与えたのか、を考察した。

#### **朴 智宇（パク ジウ）「小説『女優』」**

本稿では主人公の松村将が映画『女優』の助演、井土川マリアの失踪事件について調べて行く中映画の興行を祝うため開催されるパーティーに招待され、そこで起こる事件と共に失踪事件の真相を探っていく話を述べている。

日本語で小説を書いてみることで母語である韓国語との表現の違いを知り、より自然な表現のため、今までより更に日本語について考察し学習に励むことができた。

#### **本間 笑子（ホンマ ショウコ）「三島由紀夫『仮面の告白』論 主人公の語り」**

三島由紀夫の『仮面の告白』は主人公の視点によって自己が語られていく告白小説としての性質を備えている。『仮面の告白』では主人公は異性を愛することの出来ない同性愛者としての自身の性的志向を語っている。本論ではそうした主人公の告白はなんのためになされるのかという点と、その告白によってどのような主人公の自己像が作り上げられたのかという二点で語り手である主人公について再考する。

#### **水久保 ちあき（ミズクボ チアキ）「小説『美也子の遺書』」**

昭和十四年、新劇女優の萩原美也子が失踪した。同じ劇団に所属した女優・ルリ子の証言、かつて美也子に恋をしていた雑誌記者・永吉の手記、そして美也子自身が書いた手紙を通して、彼女の抱えた愛情と憎悪を追っていく。

#### **尹 惠仙（イン エセン）「『源氏物語』から見る薫の人物像—恋と道心を中心に」**

本論文では宇治十帖の主人公—薫の人物像について分析した。出生の秘密は薫の人生に大きな影響を与えた。出生の秘密に焦点を当てることにより、薫の道心の正体、道心と恋の関係について考えてみた。また、薫の女性関係を分析することによって薫の女性観についても触れてみた。最後に、宇治十帖以降の薫の恋と道心の行方について考えてみた。薫の人物像を分析することにおいて道心と恋は避けられない問題だと考えられる。

#### **張 念曦（チョウ ネンシ）「『万葉集』における大伴家持の恋歌に関する研究」**

「万葉集」における大伴家持の恋歌を研究した。まず序論に古代の恋愛生活や大伴家持

という人物などについて紹介する。本論では、家持の経歴を取り上げながら具体的な歌を分析する。笠郎女や紀郎女との相聞歌をはじめ、次に、妾への挽歌を取り上げ、そして、妻坂上大嬢との相聞歌を、最後に叔母大伴坂上郎女との相聞歌を分析する。それぞれの歌に家持の歌創作時の心境や彼の恋愛での一面の成長や、恋歌創作一面での成長を伺う。

### **麻野 智史（アサノ サトシ）「日本における子どもの貧困と学習支援—ボランティアとして携わる大学生の声にみる学習支援の成果と課題」**

子どもの貧困の現状・貧困が子どもに与える負の影響については、多くの先行研究がなされている。一方で、近年広がる貧困を抱える子どもたちを対象とする学習支援事業に焦点を当てた研究はあまり見られない。そこで、本論文では、日本における子どもの貧困の現状、貧困が子どもに与える負の影響に加え、学習支援ボランティアに携わる大学生 7 名を対象としたインタビュー調査を基に、主に学習支援の成果・課題について考察を行った。

### **李 東炫（イ ドンヒョン）「2015 年慰安婦合意から考える日韓関係—植民地支配の未清算と被害者の排除の問題」**

本研究では、2018 年現在、日本と韓国の外交関係において一番大きな解決課題となっている慰安婦問題を軸とし、日韓両国の戦後秩序を構築した極東軍事裁判、サンフランシスコ講和条約、日韓基本条約、慰安婦合意を取り上げ、植民地被害の清算と被害者排除の問題を指摘し、その中でも日韓基本条約と慰安婦合意の類似性について分析する。そして、世論調査を通じた日韓の国民意識と最近の両国の政府の動きを把握し、これからの日韓関係について考察する。

### **李 珉采（イ ミンチェ）「在日文学の女性像」**

在日コリアンは日本社会のマイノリティーであり、在日コリアン女性はその中でもさらに、マイノリティーの存在だと言える。私は「宗秋月」「金蒼生」「金真須美」という三人の女性在日コリアン作家の作品を通じて作品に現れた多様な形の女性像に注目した。今まで在日文学は世代を重ねながら多くの変化を見せてきており、女性作家たちの登場は女性に対する社会的意識の変化とともに現代社会の多様な変化を代弁している。本論文では女性の視点で女性を描いた在日女性作家の女性像とその変化について述べた。

### **肖 理佳（ショウ リカ）「上海日本人学校の教育方針とその役割の変遷から見る日中関係」**

本論文では、上海の日本人学校に焦点を絞り、戦前から現代まで、日本人居留民、特に学生の中国社会との関わりの実態を解明し、そして将来に向けてどのように日中関係に影響するかを検討した。特に、学校という特殊な場所は、学生の思想を養成していくところであるため、国民性を大きく反映している。研究を通じて、上海の「租界」という特殊な歴史を再認識した上、日中関係の将来性を日本人学生の意識の変遷を通して明らかにした。

**松井 俊輔（マツイ シュンスケ）「「kamikaze」が意味するものとは？日本とフランスの相違—2015 年 11 月 13 日のパリのテロ報道から」**

この卒業論文では、日本とフランスにおける「kamikaze」に対する認識の相違を、神風特攻隊やテロリズムの歴史とそれらに関する報道記事を参照しながら検証していく。「kamikaze」という語は、第二次世界大戦末期では「神風特攻隊」を指していたが、時の流れと共にフランスでは「テロリスト」という意味を持ち始め、現在はその用法が定着している。それ故、「kamikaze」＝「テロ」というフランスでの表現に、私たち日本人は違和感を覚えるのだろう。

**山根 裕史（ヤマネ ヒロシ）「技能実習法による制度の変化と外国人受け入れの将来について」**

本論文では、技能実習法による制度の変化と外国人受け入れの将来について論じていく。まず、技能実習制度の成り立ちを振り返り、制度の問題点を整理していく。さらに新しく施行される技能実習法により技能実習制度がどのように変化すると考えられるのかについて論じ、その効果と限界について明らかにしていく。後半では技能実習制度の限界から外国人労働者の受け入れ制度の整備の必要性について論じていく。

## 編集後記 Editor's Note

本誌はこの号から、電子出版となり、紙媒体での出版を停止します。大学からの刊行物は、原則として電子媒体によるという、東京外国語大学全体の方針に従ったものです。紙の雑誌への愛着はありますが、より広い範囲での学術の交流という面では、電子出版であることに優位性があることは明らかです。

本号から、各論文に日英両語による要旨とキーワードを整備し、世界中からの電子的検索により、論文が広く読まれるように紙面を整備しました。今後も、質の高い学術成果を、世界中に発信して行きたいと考えております。皆さんの積極的な論文投稿を期待しております。

なお、電子出版という特性上、この雑誌の性格も、より学術性を強める方向に向かって行くものと思われます。今年度は、「卒業生短信」の投稿がなかったので、こちらからの依頼もあえてしませんでした。「彙報」の部分は従来通りですが、見直しも必要でしょう。そのあたりも、次号以後、順次整えて行きたいと思います。訪問した海外の大学の書架に、本誌が並ぶ様子を何度も嬉しく見て来ましたが、そうした物理的な印象を越えた学術貢献は、より広く深い範囲に及ぶことを信じております。

2018年3月 『日本研究教育年報』編集委員会

編集委員 村尾誠一（編集長・日本文学）  
海野多枝（日本語教育学）  
阿部新（日本語教育学）

## 投稿規定

### Manuscript Submission Guidelines

#### 1. 投稿原稿の内容

投稿原稿は、未公開のものに限ります。他の学会誌・協会誌、紀要、商業誌などに発表されたもの、および、それらに掲載予定もしくは応募中のものは投稿できません。未公開の卒業論文・修士論文・博士論文の一部などは、その旨を記載して投稿すること。

#### 2. 投稿原稿の書式

使用言語は日本語を原則としますが、他の言語の使用を希望する場合はご相談ください。組版は横組みを基本とし、仕上がり紙面は、「1 ページ＝40 字×36 行、余白＝上：35mm、下・右・左：30mm」（禁則処理 ON）とします。なお、句読点は「。」「、」を原則とします。

#### 3. 投稿原稿の種類と分量は、次の基準によるものとします。

論文：仕上がり紙面 18 ページ（400 字づめ原稿用紙 65 枚相当）以内  
研究ノート：仕上がり紙面 12 ページ（400 字づめ原稿用紙 40 枚相当）以内  
実践報告：仕上がり紙面 12 ページ（400 字づめ原稿用紙 40 枚相当）以内  
短 信：仕上がり紙面 6 ページ（400 字づめ原稿用紙 20 枚相当）以内

#### 4. 投稿の際に提出するもの

投稿の際には、原稿 4 部（正本 1 部、コピー 3 部）と、以下の事項を記した「確認メモ」を提出してください。

- 1) 論文等の日本語題目および英文タイトル
- 2) 仕上がり紙面のページ数
- 3) 氏名の漢字表記（あれば）、ローマ字表記、ひらがな表記
- 4) 住所・電話・FAX 番号、E メールアドレス
- 5) 現在の所属

なお、採用決定後には、完成原稿の電子媒体によるファイルも、提出していただきます。また、いずれの提出物も、原則として返却しません。ご了承ください。

#### 5. 採用・不採用の決定

投稿された原稿の採否は、編集委員会委員および編集委員会から委嘱された審査委員による厳正な査読に基づき、編集委員会の総意によって決定します。

#### 6. 投稿の締め切りと審査結果の通知

投稿の締め切り日は、毎年 9 月末日です。

審査結果は、原則として 11 月中旬までに通知することとします。

#### 7. 掲載された論文等については、本誌 10 部をさしあげます。

8. 本誌に掲載された論文等に関しては、著作者が著作権を有しますが、著作権法で規定する複製権および公衆送信権等については、著作者は国立大学法人東京外国語大学にその使用を許諾するものとします。ご了承の上、投稿してください。

#### 9. 投稿の提出先・問い合わせ先は、次の通りです。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学 日本語教育準備室内

『日本研究教育年報』編集委員会

E-Mail: japan.nenpo@tufs.ac.jp

TEL/FAX 042-330-5349（直通）

---

2018 年（平成 30 年）3 月 31 日

編集・発行 東京外国語大学 日 本 専 攻  
東京都府中市朝日町 3－11－1  
〒183-8534 TEL 042（330）5349

---